

京都発 透析最新医療

高齢者透析医療が抱える課題への新たな取り組み

社会福祉法人京都社会事業財団 にしがも透析クリニック



2010年4月、京都市北郊の西賀茂地区に、社会福祉法人 京都社会事業財団 にしがも透析クリニックが新設された。同クリニックは、全国でも先進的な「介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）を併設した透析クリニック」であり、特別養護老人ホームに入所しながら透析を受けられるという特徴をもつ。また、1972年より透析医療に取り組み、京都地域で重要な役割を担ってきた同一法人下の西陣病院の全面的なサポート体制を整えており、今後ますますニーズが高まると予想される高齢者透析医療をとりまく課題にも対応できる画期的な施設として期待されている。そこで、京都透析医会会長であり、西陣病院透析センター長の今田直樹先生および、にしがも透析クリニック院長の青木正先生に、現代における透析医療の課題と特別養護老人ホーム併設の透析施設であるにしがも透析クリニックが果たす役割についてお話を伺った。

● CONTENTS (ページ内リンクになります)

▶ 今田直樹先生 (京都透析医会 会長/西陣病院透析センター長)

- ▶ 環境の変化に合わせた対応が良質な透析医療の提供を可能にする
- ▶ 高齢透析患者さんにとって「通院」は透析継続の大きな障壁である
- ▶ 高齢透析患者の受け入れが可能な「特別養護老人ホームを併設した透析クリニック」の新設
- ▶ 特別養護老人ホーム併設透析クリニックは、高齢透析患者のQOLを改善する
- ▶ 中核病院との連携が安定した透析医療の実現をより確実にする
- ▶ 透析クリニックと特別養護老人ホームの併設は、施設スタッフにも好影響を与える
- ▶ 理想的な高齢者透析医療には、患者さんの自立が極めて重要である
- ▶ 特別養護老人ホーム併設にしがも透析クリニックの課題と今後の展望

▶ 青木正先生 (社会福祉法人京都社会事業財団 にしがも透析クリニック 院長)



高齢者にも良質な透析医療を提供する 特別養護老人ホーム併設透析クリニック

京都透析医会 会長/西陣病院透析センター長 今田 直樹 先生

■ 環境の変化に合わせた対応が良質な透析医療の提供を可能にする

20~30年前まで、透析患者といえば予後は不良で、透析導入後10年間生存することは難しいとされていた。しかし近年の透析医療の進歩により、治療の質は格段に向上し、透析による患者さんの身体的負担や予後は劇的に改善された。しかしその一方で、わが国では高齢化と核家族化が進み、一人暮らしの高齢者が増えており、こうした患者さんをどのように治療をしていくのか、現代の医療体制には大きな課題が課されている。特に透析医療では週3日の透析のための通院、家族による介護、病態急変時への対応などが必須となるため、その深刻さは増している。



社会福祉法人京都社会事業財団
西陣病院

このような透析医療の急激な環境の変化に対して、社会福祉法人京都社会事業財団 西陣病院は柔軟に対応し、透析患者さんのニーズに応じてきた。西陣病院は1972年7月より透析医療を開始、新しい治療法を取り入れ、機器整備、医療スタッフ研修制度などを整えながら、常に患者さんに目線を向けた透析医療を追求してきた。平成19年には、より快適な透析医療を目指すために、各階に分かれていた透析室をワンフロアに集結させた。平成20年には、長期入院が必要となる透析患者さんに対応するため、透析病床を8床新設し、透析治療における急性期から慢性期、そして終末期にまで対応できる医療施設として、京都市の透析医療の中核を担ってきた。そして、西陣病院の透析センター長として今田直樹先生が新たに就任してからは、患者満足度が高く、かつ医療スタッフにとっても働きがいある透析医療を実現し、地域医療への貢献度を高めることを目指している。

今田先生は、透析医療に対する真摯な取り組みと、西陣病院での実績が高く評価され、2010年4月からは京都透析医会の会長に就任し、京都府全体の透析医療の発展というより大きな目標にむけて、精力的に活動している。

高齢者に対する透析医療を進めていく中で最も重要視していることは、「透析患者さんの自立」である。透析医療保険制度によって、患者さんは経済的には多くの負担を強いられることなく透析医療を継続することができ、その継続期間は、透析医療の発展、充実によって年々長くなっている。それ故に、透析患者さん自身が、保険制度に支えられて透析を継続できることの重要性を理解することが大切であり、西陣病院では透析患者さんの生活習慣の改善、透析スケジュールの遵守などの「透析患者さんの自立」を目指した患者教育にも力を入れている。こうした活動は、透析患者さんの行動を変容させ、今後の高齢者透析医療のあり方をより適切なものに変えていく基盤になると考えられる。

■ 高齢透析患者さんにとって「通院」は透析継続の大きな障壁である

今田先生が京都透析医会会長に就任して一層感じたのは、いかにして高齢者に安定した透析医療を提供するかという基本的な課題である。週3日の通院の継続は、高齢者にとっては歳を重ねるごとに厳しくなる。最終的には、日常生活動作（ADL）が低下して通院が困難な患者さん、近隣に透析施設がない患者さん、十分な介護を行う身内がない患者さんには、どうしても入院が必要となる。しかし、現在の医療制度の下では、このような患者さんを急性期病院で長期入院例として受け入れることは難しく、西陣病院のように透析病床をもつ病院でさえも、受け入れ可能な患者数には限界がある。病床をもたない透析クリニックで治療を受けている患者さんは、受け入れ施設を探すのが難しい状況にあり、課題はより深刻である。

介護保険施設には、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、療養型医療施設等があるが、透析患者さんの受け入れは敬遠されることも多い。なぜなら、公的保証の対象外となる透析施設への通院、透析患者さんの病態急変時の対応、透析食の提供など、現状の制度やスタッフでは安全かつ十分な対応が困難だからである。そのため透析患者さんあるいは介護者にとって“透析を受ける”こと自体が脅かされるような事態が生じている。実際に透析医療の継続が困難なケースは増加しており、問題は差し迫っている。

■ 高齢透析患者の受け入れが可能な「特別養護老人ホームを併設した透析クリニック」の新設

高齢者透析医療をとりまく状況が厳しくなるなか、西陣病院の経営母体である社会福祉法人京都社会事業財団は、京都市より依頼を受けた。高齢者透析医療の問題を解決する一手段として、特別養護老人ホームを併設した透析クリニックを設置できないかという依頼である。そして同法人の中でも、以前より透析医療に積極的に取り組み、京都地域における透析医療の基盤を築いてきた西陣病院が、全面的に協力して、この提案の事業化を進めることとなった。事業の立ち上げに当たっては、今田先生が全体の指揮をとり、「より高度で、透析患者さんのすぐ近くで理想的な透析環境を提供する」という強い意志の下、本提案は舟山庵（特別養護老人ホーム）を併設したにしがも透析クリニックという形で実現することとなった。これは、高齢者が透析を継続する上で大きな障害となっていた通院を気にすることなく、快適に透析を受けるといった新たな選択肢の提案であり、理想的な透析医療の実現に向けた大きな一歩である。



「にしがも透析クリニック」と隣接した「にしがも舟山庵（特別養護老人ホーム）」

■ 特別養護老人ホーム併設透析クリニックは、高齢透析患者のQOLを改善する

透析のための通院が困難となった患者さんにとって、最も大きな課題は、受け入れ可能な施設が見つからないという現実であり、身体に大きな負担をかけながら通院し、介護者が大きな負担と犠牲を払いながら透析を継続している方は少なくない。このような患者さんにとって、特別養護老人ホームと透析クリニックの併設は極めて大きな意義がある。「通院」という障害を取り払って、施設に入所しながら、安定した透析治療を受けることができるからである。介護者にとって「通院」は、現実的な負担になるばかりでなく、介護者が「通院」を「負担、犠牲」と感じてしまうことに大きな罪悪感を持ち、精神的な負担となっていることも大きな問題であるが、そうした負担を取り除くことができた意義は大きい。

また、透析患者さんの食生活では、当然のことながら透析食が必要となるが、特別養護老人ホームにとっては透析食の提供も大きなハードルとなる。透析食についての知識や実践経験がないことがその理由であるが、舟山庵では、透析施設のスタッフから具体的な指示を受けることで、適切な透析食を提供することができる。

舟山庵およびにしがも透析クリニック開設にあたっては、京都市を中心に新設の案内をおこなったが、反響が大きく、多くの患者さんおよび介護者から問い合わせ、入所希望をいただいた。改めて、高齢者透析医療の抱える課題の大きさを実感するとともに、特別養護老人ホームを併設した透析クリニックのニーズの高さを再認識した。今回の新たな取り組みが、患者さんおよび介護者に対して「真に快適な透析医療の提供につながる」と確信している。

中核病院との連携が安定した透析医療の実現をより確実にする

特別養護老人ホームのような介護施設が、透析患者さんの入所を敬遠する理由の一つに、医療行為を行うスタッフが常駐できず、透析患者さんの病態が急変した場合の対応が十分にできないことがあげられる。しかし、舟山庵は、にしがも透析クリニックに併設されているため、診療時間内であれば基本的な対応は可能である。深夜などの診療時間外や、専門的な検査、手術が必要など、にしがもクリニックでは対応できない場合には、同一法人である西陣病院との連携により、緊急対応を可能にしている。にしがも透析クリニックに蓄積されている患者さんのデータは西陣病院とオンラインでつながっており、基本的なデータはオンライン上で即座に確認することができる。また舟山庵のスタッフも日常業務の中で透析患者さんと接する環境にあるため、透析についての知識を身につけつつある。そのため緊急時にも、落ち着いて、的確に患者さんの容態を西陣病院に連絡することができる。



施設内は明るく、安らげるような作りになっている

透析クリニックと特別養護老人ホームの併設は、施設スタッフにも好影響を与える

特別養護老人ホーム併設透析クリニックは、透析医療を受ける側だけでなく、提供する医療スタッフや施設にとっても利点がある。にしがも透析クリニックのスタッフと舟山庵のスタッフは透析患者さんを通して、つねにFace to Faceでコミュニケーションをとるようになった。そのため、お互いに改善していかなければならない課題や問題点を共有できる環境が構築されたという。通常、透析施設では、スタッフの研修は、当然のことながら透析施設のスタッフ間で行い、外部組織である特別養護老人ホームのスタッフと一緒に勉強する機会は少ない。そのため特別養護老人ホームのスタッフが透析についての知識や実務を身につけることは難しく、その一方で透析施設のスタッフは透析患者の介護の現状を理解しにくい。しかし透析クリニックに特別養護老人ホームが併設されていることで、お互いの分からない点、問題点などを日々の業務の中で理解し、患者さんへの対応をより望ましいレベルまで高めていくことができる。にしがも透析クリニックを新設するにあたっては、「実際に苦しんでいる通院困難な高齢透析患者さん」に焦点を当てたクリニックであることを明確に打ち出したこともあり、患者さんへの貢献に高いモチベーションをもつスタッフが集まったことも大きい。



スタッフミーティングでは常に活発な意見交換がされている

理想的な高齢者透析医療には、患者さんの自立が極めて重要である

にしがも透析クリニックにおける患者教育には、今田先生が透析治療で最も重要視している「高齢透析患者さんの自立」が息づいている。透析患者さんの自立には、透析に要する費用を保険で賄うことができることの社会的意義を理解する精神的な自立と、身の回りのことはできる限り自身で行うという運動面での自立がある。にしがも透析クリニックでは、抜針後の止血ができない患者さんや自分で車いすから立ち上がることができない患者さんが、自分の力でできるように運動面での自立のサポートに力を入れている。運動面での自立を促すことが、最終的には精神的な自立へとつながり、透析医療を継続しながら、有意義かつ生きがいのある生活が実現できるようになると考えている。

特別養護老人ホーム併設にしがも透析クリニックの課題と今後の展望

特別養護老人ホーム併設の透析クリニックを実際に開設して2ヵ月経つが、この取り組みによって、現在京都市を含めて全国の透析施設が抱えている「高齢者の透析治療」という課題に、解決の糸口を示すことができた実感している。このモデルが高い評価を受け、定着すれば、京都、そして全国の透析施設にも同様の取り組みが波及していくものと考えられる。しかし懸案事項も多く残されている。透析クリニックが併設されたことによって、特別養護老人ホームに透析患者さんを受け入れることが可能になったが、それは、実際には従来よりも病態の進んだ患者さんを受け入れることでもある。そのため、スタッフにとっては今まで以上の実務能力が必要とされる。そして、スタッフにはその能力に見合った報酬や福利厚生が必要だと考えている。現在の医療制度の枠の中で、経営的な側面も含めて、そうした労働環境をどうやって整えていくのが今後の課題である。

特別養護老人ホームを併設した透析クリニックは優れたモデルではあるが、特定の恵まれた環境ゆえに実施できた部分もあり、全ての透析クリニックが特別養護老人ホームを併設できるわけではない。それよりも、現存の特別養護老人ホームが透析患者を受け入れるようにすることの方が重要である。現在、老人ホームで透析患者さんの入所を敬遠する最大の理由は、透析患者さんに十分な対応をすることができないからであるが、それは透析患者を受け入れた経験が少なく、経験が少ないがために透析患者さんに十分に対応できる自信を持ってないことに起因している。今回の特別養護老人ホームを併設した透析クリニックが先駆的な実例としてうまく稼働し、モデルケースとして認められれば、舟山庵のスタッフが透析患者さんと接しながら集積した経験には大きな価値がある。そして、舟山庵のスタッフが他の多くの特別養護老人ホームにその知識や経験を広めていくことができれば、透析患者さんの受け入れを前向きに検討する施設は増える可能性がある。インタビューを終えるにあたり今田先生は、こうした活動が、より多くの高齢透析患者さんに、よりよい透析医療を提供するための環境整備に繋がると期待していると力強く語った。

「理想的な高齢者の透析医療」を目指して



社会福祉法人京都社会事業財団
にしがも透析クリニック
院長 青木 正 先生

にしがも透析クリニック院長の青木正先生は、西陣病院透析センター長を務めるなど、京都における透析医療の発展に長年携わってきた。

にしがも透析クリニックは、透析ベッド20床（感染症ブース2床を含む）を備えた泌尿器科単科の無床診療所であり、同一法人の西陣病院、併設の特別養護老人ホームにしがも舟山庵との連携のもと「高齢の透析患者さんへの理想的かつ高度な透析医療の提供」を目指している。スタッフの多くは、西陣病院で透析医療の経験を積んでおり、この理念に基づき一丸となって質の高い透析医療を提供することを心掛けている。

例えば、毎朝のミーティングにおいて、スタッフひとりひとりが「今日の目標」を発表するなど、少しでも良質な透析医療を提供しようという一丸となっている。これは当初、予想していなかったことであり、このようなスタッフの自主的で前向きな姿勢が特別養護老人ホーム併設の透析クリニックという今回の取り組みの価値をより一層高めている。

また透析医療では、患者さんは週に3日、長時間にわたる透析を継続する必要があり、少なからず精神的な負担を受けている。そのため、にしがも透析クリニックでは、待合室や診察室のデザインは機能性、安全性を追求しながらも、明るさや優しさを感じていただけるものを採用し、スタッフの対応と合わせてぬくもりを伝えることで、患者さんに心の安らぎと満足感を与えていきたいと考えている。

透析病院、透析クリニックおよび併設された特別養護老人ホームとの連携による高齢者の透析医療という先進的な試みが、透析患者さんのQOLを改善するモデルケースとして認められ、透析患者さんのニーズに合わせた透析環境の選択肢が広がることで、「理想的な高齢者の透析医療」が実現し、90歳、100歳の患者さんが透析と共に穏やかで有意義な日々を送っていただくことに貢献していければと青木先生は熱く語った。



にしがも透析クリニックの透析室

